老婆あり。初めて無著を見咎めて曰く、汝何すればかく汚らはしき犬を負ふぞと。

無著その後、現觀莊嚴論を著して密教修行の道を開く。密教においては文殊菩薩智慧を司り、彌勒菩薩方便を司るとせられ、彌勒の直弟子たる無著の存在の重きこと譬へやうもなし。

片や弟の世親小乘の道を歩みて說一切有部に入り研鑽を積む。その師のサーンキア派との論戰に敗るるや、世親一書を著して法敵を論破し、時の王の賞を受け弘くその名を知らるるに至る。その後佛教の存在論の集大成たる阿毘沙達磨倶舍論を著し小乘佛教の頂點に立つ。倶舍論は佛教の金字塔の一にして、中國を經て遠く日本にも傳り、大乘の僧侶と言へども凡そ佛教學を志す者は學ぶべき必讀の書とせらる。

世親、アヨーディヤの地に據って說一切有部の教へを說きたるが、一日兄無著の訪問を受く。雁の便りに兄は既に亡き者と聞及びし世親、怪しみつつ兄に會ひ軈て兄弟の間に論爭起こる。主知主義の小乘の立場に立つ世親、物質・思考を超えたる次元のあることを知らず。大學者として精緻なる論理を引提げ無著に舌鋒鋭く迫るも、この世の者に非ざる兄に異次元の世界を疑ふべくもなく示さるるに及んで、之まで安住せし論理的日常次元の世界一擧に崩壞す。自らの非を悟りし世親、舌をきりて佛陀にその非を詫びむと悔ゆること甚し。兄それに及ばず爾後その舌を以て大乘を說くべしと慰めて靈界に去る。

大乘に轉ぜし世親の活躍著しく、唯識論を確立し、更に淨土論の基礎を築く。正信偈に「天親菩薩造論說」、「天親菩薩論注解」とある天親菩薩は他ならぬ世親なり。親鸞聖人世親より一字を受けて親鸞と號せしことによっても明らかなるが如く、わが國においては世親は龍樹菩薩と竝び佛祖に次ぐ地位を得たり。されどその兄なかりせば弟の佛道を究むるは能はざりしことなり。

「尾崎紅葉と泉鏡花

加藤　淳平

一　本日は、「文語の苑」の、本年『明治大正文語五十撰』なる文語教科書を編纂せるに因み、該教科書に文語文を採錄せる二人の作家、尾崎紅葉と泉鏡花師弟に就き、一席、拙き話を試みむ。本年は、明治三十六年、西暦一九〇三年に死歿せる尾崎紅葉が、死去百十周年、明治六年、西暦一八七三年生れの泉鏡花が、生誕百四十周年に當る。

二　明治維新後、成立せる明治新政府、歐米の國に倣ひて、新しき國の體制確立を模索す。政府、軍にても、財政・經濟にても、又法制・學制等にありても、體制整備には、先づ歐米人「お雇ひ外人」の協力を得。同時に全國より俊才を集め、日本人人材を養成す。斯く養成せられたる日本人人材、日本の現實に適合せる體制を造出せり。

大學の制度整備、卽ち東京の國立大學、現下の東京大學の創設、亦同樣に行はる。文學部の英文學教授、ラフカディオ・ハーン、英國留學後歸朝せる夏目漱石に、職を讓りたる例の如し。

美術と音樂、亦同樣なり。西歐的美術と西歐音樂、導入せられ、それに基づきたる美術教育・音樂教育の體制確立せらる。現在の「東京藝術大學」是なり。

大學と美術・音樂の西歐化・歐米化の風潮、文學にも波及す。

三　茲に文學と言ふは、ほぼ小說、戯曲、詩歌・俳句なり。そが情況、明治初年に如何なりしやを一瞥せむ。文學は、「お雇ひ外人」の協力を得る能はざれば、近代化遲し。

第一に小說、戯曲、明治中期までは、江戸文學、ほぼ其の儘に繼續す。戯作の假名垣魯文、歌舞伎臺本は河竹默阿彌、明治時代前半は、此の二人の時代なり。魯文は、西洋旅行等新しき題材に挑み、默阿彌、散切り頭の人物を登場せしむる等新しき風俗を取入るれど、內容は何れも、江戸時代の延長の如し。

第二に詩歌・俳句は、やや先立ちて、明治十六年（一八八二年）頃より、新風兆す。詩は明治十六年に、『新體詩抄』發刊せらる。こは新體詩、卽ち新しき體の詩の集成にて、基督教讃美歌を、牧師等、日本語五七調文語に譯したる事の影響、顯著なり。俳句にありては、正岡子規が改革運動、明治十七年（一八八三）より始まる。

第三に小說には、政治に於ける自由民權運動に觸發せられ、政治小說なる小說、廣く讀まる。但しこは近代小說と樣態を異にす。政治小說の全盛期は、明治十六年（一八八二年）より明治十九年（一八八六年）までなりき。

四　明治十八年、卽ち一八八五年こそ、日本の近代文學が劃期的年なれ。この年、一つは『小說神髓』の發表、今一つは「硯友社」結成の、二つの重要事あり。

『小說神髓』は、坪內逍遙が氣鋭の文學評論なり。江戸時代の戯作と當時の政治小說に異なる、新しき文學を唱導す。逍遙、そが實例とて、自ら『當世書生氣質』なる小說を書きて、世に問へど、こは未だ

江戸戯作風の小說の域を出でず。

「硯友社」は、東京の大學豫備門、後の第一高等學校、今の東京大學教養學部の學生等の、結成せる文學團體にして、雜誌「我樂多文庫」を發刊せり。雜誌と云ふも、初めは、手書き草稿を紙縒りもて編みたるものなりとぞ。「硯友社」、「我樂多文庫」が命名者にして、指導者たりしが、尾崎紅葉なり。

坪內逍遙の唱へたる新しき文學、二年後に發表せられたる最初の言文一致體小說、二葉亭四迷の『浮雲』、そが嚆矢と認めらる。のみならず此の頃より、日本近代文學の傑作とせらるる小說、左記年表の如く、續々と發表せらる。是、日本近代文學の黎明、卽ち夜明けなるめり。

一八八五（明治十八）年　坪內逍遙『小說神髓』と『當世書生氣質』
　大學豫備門＊學生による「硯友社」結成、雜誌「我樂多文庫」發刊
　　＊後の第一高等學校、今の東京大學教養學部
一八八七（明治二十）年　二葉亭四迷『浮雲』（最初の言文一致體小說→「である」調）
　山田美妙『武藏野』（最初の言文一致體新聞小說→「です」調）
一八八九（明治二十二）年　尾崎紅葉『二人比丘尼色懺悔』、幸田露伴『風流佛』
一八九〇（明治二十三）年　森鷗外『舞姬』
一八九一（明治二十四）年　幸田露伴『五重塔』、齋藤綠雨『かくれんぼ』
一八九二（明治二十五）年　尾崎紅葉『三人妻』、森鷗外『卽興詩人』

此の時代、代表的作家と目せられたるは、「紅露」、卽ち尾崎紅葉と幸田露伴なり。或いは之に坪內逍遙

と森鷗外を加へ、「紅露逍鷗」とも稱せらる。

尚言文一致、卽ち口語にて文章を書かむとせる運動、先づ文學、特に小說より始む。文學の言文一致運動盛んなれど、其の頃、新聞の記事・論說は、文語にて書くが常例なり。

五　尾崎紅葉は、東京の未だ江戸と呼ばれし頃の芝、現在の濱松町、芝紅葉山の近在に生る。紅葉なる雅號、紅葉山に基づく。根付師なりし父は、同時に幇閒、卽ち「太鼓持ち」と呼ばれたる、花街にて客の取持ちをする職業の人なり。幇閒は卑しき職業と見らるれば、紅葉、終生父の職業を恥ぢたりと云ふ。

紅葉、東京の府中學、卽ち現下の日比谷高校に通ひ、同級生に幸田露伴あり。早熟の大秀才にして、中學より、十五歲にて大學予備門に入學す。十七歲の時、「硯友社」結成と「我樂多文庫」發刊の指導者たり。「硯友社」に、今一人の早熟の秀才、山田美妙あり。美妙は紅葉の同志にして、「硯友社」の指導者格の作家なれど、「言文一致運動」に向ひたるにより、文語文に執着せる紅葉と訣別す。

六　尾崎紅葉と同年の人、但し嚴密には、西曆に非ずして、當時の日本の曆に基づく慶應三年生れの人、左記の如く、夏目漱石、幸田露伴、正岡子規、齋藤綠雨を數ふ。西曆に據らば、紅葉は一九六八年一月生れにして、漱石等の一年下なり。

夏目漱石　一八六七年二月ー一九一六年

幸田露伴　一八六七年八月ー一九四七年

正岡子規　一八六七年十月ー一九〇二年

尾崎紅葉　一八六八年一月ー一九〇三年

齋藤綠雨　一八六八年一月ー一九〇四年

山田美妙は、西曆にては紅葉と同年なるも、慶應四年、卽ち明治元年に生る。

七　尾崎紅葉の年譜、左記の如し。二十一才にして流行作家となり、二十代前半にて、押しも押されもせぬ文壇の大家たり。三十五才にして世を去る。

一八八九年（二十一才）『二人比丘尼色懺悔』（世に流行す）、讀賣新聞社入社

一八九〇年　帝國大學（國文科）退學

一八九一年　泉鏡花入門し、尾崎家の書生となる

一八九二年　『三人妻』（絢爛豪華なる文體の文語小說）

一八九六年　『多情多恨』（地味なる文體の言文一致體小說）

一八九七年（二十九才）　『金色夜叉』連載開始、大評判となる

以後療養と轉地の傍ら、斷續的に『金色夜叉』の連載を續く

一九〇三年（三十五才）　東京牛込（今の新宿區）の自宅にて胃癌に因り死去

八　尾崎紅葉は、日本近代文學最初の文豪なり。若く死去し、惜しまる。作家たる紅葉を總括せば、下

記六點に纏めらるべし。

第一に、若き天才にして、文壇の大御所なり。

第二に、泉鏡花を始めとせる弟子等を可愛がり、親身に指導す。鏡花の外の弟子に、田山花袋、徳田秋聲等あり。

第三に、文章の推敲を重ね、文體に凝る。日本の近代小説、一九〇〇年頃以降言文一致體、卽ち口語文によりて書くが主流となれば、口語文を嫌ひたる紅葉、その意味よりせば、時代に遲る。されど紅葉、亦、言文一致體の傑作小説『多情多恨』を書けり。

第四に、江戸文學を繼承す。特に井原西鶴より學ぶ。こは幸田露伴も同じなり。

第五に、紅葉の小説は、寫實を基本とせる社會小説なり。骨格大きく、廣き社會性、現實性あり。

第六に、虛構性を重視す。紅葉は自ら常々、小説は「想像にて書く」と言へり。『三人妻』、『金色夜叉』の主人公等に、時にモデルの云々せらるるも、凡て紅葉の頭より出で、特定のモデル無きが事実ならむ。

最後の三點、殊に第五の社會性と第六の虛構性重視、其の後の日本の自然主義以後の、所謂「私小説」の主流となりし文學とは異なれり。蓋し紅葉の文學、寧ろ歐米の文學に近からむ。

九　尾崎紅葉が傑作とて世評高きは、『三人妻』と『多情多恨』なり。『三人妻』は、徳田秋聲、谷崎潤一郎、舟橋聖一、之を高く評價す。絢爛たる文章の文語小説にして、「文語の苑」が『明治大正文語五十

撰』には、『三人妻』の冒頭を採錄す。成り金の金滿家なる主人公をめぐる、本妻と三人の妾の性格描寫、卓拔なり。對照的なるは言文一致體小説の『多情多恨』にして、田山花袋之を絶讚す。妻を亡くせる男の妻戀ひの物語なれば、それにふさはしく、墨繪の如き淡彩の文體を用う。

十　尾崎紅葉最後の大作は、『金色夜叉』なり。『金色夜叉』廣く知らるれば、通俗的大衆小説と見らるること多し。先づ、小説の筋、米國の大衆小説よりヒントを得たり。紅葉は英語の達人にして、英語の小説を讀み漁り、そこより小説のヒントを得ること多かりしとぞ。又紅葉自身、常々、新聞小説は面白きが肝要なりと言へり。『金色夜叉』を紅葉、「どうせお芝居さ」と言ひ棄てたりとも傳ふ。但し紅葉は江戸っ子にして、照れと恥らひ強ければ、割引きする要あるべし。紅葉の弟子なるも、師とかなり考へを異にせる田山花袋、此の小説を、「絢爛な文章と結構の通俗的に面白い内容」と評せり。これら、『金色夜叉』を通俗小説視せしめたる因ならむ。

十一　然るに、田山花袋と同じき自然主義派の作家なれど、批評の的確さに定評ある正宗白鳥が見方、些か異なれり。『金色夜叉』を、「紅葉が自己の天分と蘊蓄とを傾注した小説…最も面倒な題材にぶっつかって藝術的奮闘を試み…一代の才人が織った錦繡の美…」と評し、未完ながら、紅葉の最高の傑作と見る。我、此の正宗白鳥が評言に共感す。

十二　『金色夜叉』の發端、新春正月三日の晩なり。東京山の手の邸宅に、大勢の若き男女ら集ひて、百人一首のカルタ取りに熱狂す。亂暴なる書生ら、着飾りたる若き娘らが中にありて、一際目立つは、柱蔭に愼しやかに坐するも、松の内なれば、着飾りて薄く化粧せる鳴澤宮なり（鏑木清方畫伯挿繪）。

十三　此の邸宅に一人の紳士、人力車を驅って訪ね來る。主人夫婦、鄭重に之を迎ふ。富山銀行が御曹司、富山唯継なり。無名指に嵌むる指輪の巨大なるダイヤモンド、書生ら、娘らが驚嘆と疾視と噂の的となりつ。富山早速にカルタ取りに加はり、もみくちゃにせらるるも、共に競技に加はりし宮を見染む。

十四　カルタ會終りて、客引揚ぐ。宮と共に歸り行きたるは、カルタ取りにては目立たざりし、高等中學の制服を着せる學生、間貫一なり。貫一、若くして兩親を失ひし孤児にして、亡父が生前恩を掛けたる宮が父親に引取られ、養育せらる。貫一と宮は幼時より、兄と妹の如く育てらる。宮が兩親、貫一の人物を見込み、ゆくゆくは宮の婿として、鳴澤家を繼がせむと思ふ。貫一亦宮を將來の妻と決め、鍾愛す。

十五　但し宮、大人となる過程に、自らが容色に自信を持ち始む。十七才の頃通學せる音樂學校の外國人教師より、附け文せられたる經驗、宮をして、漠然と將來の玉の輿を望む少女の夢を膨らましむ。貫一を兄と慕ひつつも、少女の夢を吹っ切る能はず。

十六　富山家より宮に、緣談の申し出來たる。兩親は宮が氣持を尋ぬれど、宮は明確に返答せず。兩親、宮は緣談を受くる意ならむと忖度す。宮に踏ん切りを付けしめんため、母親、宮を連れて熱海へ赴き、父親、貫一に、宮を諦むるやう慫慂す。

十七　貫一、宮が父親の言に承服し得ず。母親と同行せる宮を訪ね、熱海に赴く。熱海の梅園にて貫一、富山と同行せる宮と母親を見る。宮ら、約束して富山と會ひたるに非ず、富山は、たまたま訪ね來れるも、貫一さは思はず。

十八　これより、名高き、貫一お宮が熱海の海岸の場となる。三つの場面に分け、熊澤南水女史の朗讀を聽かむ。第一は、熱海の海岸の場景なり（熊澤南水女史朗讀、鏑木清方畫伯挿繪）。

貫一、宮と母親の熱海に來たるは、富山と逢ふためならむと責む。宮、そは邪推なりと否定、貫一尙詰問す。（熊澤南水女史朗讀、鏑木清方畫伯挿繪）

一たびは貫一、宮心變りせりとて落膽すれど、再び氣を取直し、宮の富山が財産に惹かれ、結婚せむとするのは、宮のためならずと說得す。然れども貫一が情理を盡したる說得、宮の氣持を翻意せしめ得ず。（熊澤南水女史朗讀、鏑木清方畫伯挿繪）

貫一、宮を蹴倒すも、宮の傷つきたるを見るや心配す。「これぞ紅葉なる」と泉鏡花は言ふ。いかに憎

むとも、人の傷つかば氣に懸けざるを得ず。紅葉が筆、斯く動く。

十九　最後に宮、何を言はむとせるや。恐らくは、宮の富山と結婚せば、貫一のためともならむ、富山が財産、貫一の出世に役立たむとなるべし。されどそは、貫一の了解し得る所に非ず。貫一にとり、宮が結婚は凡ての終りなり。兄の如く貫一を見る宮に、そは理解し得ず。男女の氣持すれ違へり。

二十　茲に些かの脱線を許し給へ。詩人室生犀星、詩に

往昔（そのかみ）の娘ら　茶飲みになど誘へど
人妻に　何の語らひあるものぞ

と詠ふ。大方の女性讀者、此の詩を讀みて、「何故ぞ」と首を傾ぐ。男子には分るも、女性には理解し得ずと覺ゆ。女性は、結婚前も結婚後も、人格の變ずるに非ざれば、結婚後も、結婚前と同じく、親しき男性と付合ふに何の支障かあるべき、と思ふらむ。男性はさにあらず。結婚し、一家の主婦となれる女性に、他家の男、輕々に近付くべからず。當に遠慮あるべきなり。是、男女の氣持のすれ違ひならずや。

二十一　熱海海岸の場、斯く終れり。貫一、宮に言ひし如く、鴫澤の家には二度と戻らず。高利貸の家

に住込み、情け無用の金貸し業務に勵む。「金色夜叉」とは、金の色に取憑かるる債鬼、即ち夜叉の事なり。貫一、さる者に成り果つ。

二十二　されど宮は、熱海の海岸にて、貫一が眞實の氣持に打たる。かるが故に少女の夢を脱し、大人の女の愛に目覺む。『金色夜叉』の一登場人物語るらく、女の愛は、少女の見惚れ、やや成長せる女の氣惚れより、成熟したる女の底惚れに進み、底惚れとならば一生續くと。宮は、貫一に底惚れせるなり。

富山家に嫁ぎても、貫一を忘るる能はず。際限なく手紙を書きては郵送す。貫一はそを讀みもせで、破り棄つ。夫の富山の氣遣ひ、宮には鬱陶しきのみ。宮と富山の夫婦關係惡化し、富山は外にて遊蕩するのみか、宮の居る家内へ藝者を連込むまでになれり。

二十三　明治三十二年一月、尾崎紅葉、病氣にて休載したる『金色夜叉』の連載を再開す。貫一、貸金の調査の必要より、栃木縣なる鹽原溫泉に赴く。西那須野の鐵道驛に降り、鹽原へ向ふ途上の情景描寫、「抑々鹽原の地形たる、…」より始まり、名文を連ねて續く。そは、鹽原溫泉が名を世に知らしめ、當時の教科書にも採錄せらる。

二十四　其の頃の或る日、某所に園遊会の開催せられしに、紅葉出席したれば、名流夫人十數人、ばらばらと紅葉を取卷きつ。「先生、そもそも鹽原の地形たる、とは何事でせう」、「それどころぢゃありませ

んわ」、「宮さんをどうして下さるんです」とて、紅葉に詰め寄ったりとぞ。紅葉家に歸り、弟子等に、「いや、驚かされたよ、しかし惡い氣はしなかったよ」と語れり。そは、紅葉が言葉を聞きたる泉鏡花の、書く所なり。

二十五　『金色夜叉』の筋に戻る。季節外れの鹽原の、閑散たる溫泉宿に止宿せる貫一、そこに來りし心中者の男女を救ふ。そが轉機となりて、貫一、夜叉より佛に換れり。蓄積せる財産もて、世の不幸なる人等を救ふ慈善家に轉向す。宮は夫の富山との冷き夫婦仲より、正氣を失ひて狂ひ、離婚せらる。貫一、狂へる宮を手元に引取り、大團圓となる。但しそは紅葉が腹案に過ぎず。筆の最後まで進まざるに、紅葉世を去りて、『金色夜叉』一卷は未完に了りぬ。

二十六　尾崎紅葉の死は、鹽原の場景の新聞に掲載されたる明治三十二年より、四年の後なりき。『金色夜叉』の文章に縷骨の苦心を重ねつつ、胃潰瘍より胃癌の闘病生活を續けたる紅葉、三十五才を一期として世を去れり。

二十七　紅葉は正岡子規と共に、俳句の世界にありても、一方の雄なり。其の辭世の句に、「死なば秋露の干ぬ間ぞ面白き」と言へり。「露の干ぬ間」とは「自らの生きてある間」の意なり。自らの生きてある間は面白く世を過ごせど、そは、秋の露の干ぬ間なりしに過ぎずと自嘲す。臨終の床に集ひたる見舞ひ客が愁ひ顔を見、「どいつもまづい面だ」と呟きしとぞ。これ、紅葉が最後の言葉となれり。辭世の句に自らを茶化し、最後の言葉に客さへ茶化す。まこと紅葉は、最後に至るまで、洒脫なる江戸っ子氣質を失はず。

二十八　紅葉の生前に作りし小唄、今も花街に唄はる。

止めてもかへる　なだめても
かへる、かへるの　三ひょこひょこ
とんだ不首尾の　裏田圃
ふられついでの　ええ　夜の雨

となむ。「歸る」と「蛙」、「振られ」と「降られ」の掛詞、「蛙」と「跳んだ」の縁語を用ゐ、吉原の遊女が、若き愛人の、引止むるを聞かで歸り行きたる後の、むしゃくしゃせる氣分を唄ふ。

二十九　甘党なりし紅葉の馴染みたる菓子舗に、芝神明榮太樓あり。此處に紅葉の名付けたる「江の嶋」最中ありて、今も人氣の銘菓なり。紅葉、後の時代の作家等と異なり、斯く、世間に多樣なる接點を有せり。

三十　紅葉の弟子なれど、自然主義派指導者とて、師に弓を引くこともありし田山花袋、紅葉を、「江戸生れの男らしい男」、「人を率ゐるの權威と才能を」持ちたる男なりと評し、紅葉の若き死を、「此の上なき文壇の恨事」と慨嘆す。花袋が回想によれば、紅葉、「師を去る三尺その影を踏まずと言うやうな干渉的な教育を…強ひたにも拘らず、門弟達は従順にその鞭と教へを受けて居た。その…家塾には、昔の師弟のやうな純な關係を見ることが出來た」となむ。事實紅葉門下の弟子等、擧げて文壇に進出せり。

三十一　泉鏡花晩年の小説に、紅葉門下の若き弟子等が生態を描きたる「薄紅梅」あり。麹町九段なる硯友社編輯所に、文士志望者等集ひ來たる。弟子等が上に、壓倒的權威と存在感もて立つは、親分紅葉なり。弟子等一人一人に、渾名をつけ揶揄するも、面倒見よく、徹底的に弟子等の面倒を見る。金の相談、女の相談、結婚の世話等なり。弟子に對する叱責嚴しきも、そがいつか巧みなる比喩と地口に換り、皆笑ひ出づ。鏡花が見たる紅葉は、「春照と秋霜」、春の輝きと秋の霜、嚴しき義氣と「玉の如き」溫情の師なりき。

三十二　明治期の日本の近代小説の歴史を見るに、次の事に氣付かむ。小説の主流の、文語小説より言文一致體小説に切替りたるは、西暦十九世紀と二十世紀の境目、明治三十三年頃なり。その前後に、文學の先走者の内、江戸の氣風を濃厚に受繼ぐ樋口一葉、尾崎紅葉、及び齋藤緑雨、二十代、三十代の若さにて相次ぎ歿す。その後は自然主義派の盛期となるも、短き間に飽かれ、長く文壇の本流を占めたるは、森鷗外、夏目漱石、永井荷風の、歐米よりの歸朝者なり。歐米留學者ならずして、日本人の感性に根差せる作風の幸田露伴、泉鏡花ありて、文壇に重んぜらるるも、近代文學にては少數派に甘んず。

三十三　そが、日本近代文學の性格を偏向せしめたるなきや。固より鷗外、漱石、荷風、三人何れも、日本文化の素養深し。年齢と共にそれぞれの流儀にて、日本本來の文化傳統に回歸せり。されど三人は、皆歐米文學を文學の模範とせる時期あり。三人が文學に、歐米の影響濃し。漱石と荷風、明治日本を批判し、それに對し斜に構へる姿勢強し。井原西鶴に學び、義理人情を尊びたる紅葉とは、思想を異にす。

三十四　埒も無き假定なれど、若し紅葉、一葉等の實際より長生きせば、日本の近代文學、如何なるものとなりしや。實際より廣く、社會に受入れられたるに非ずや。或いは後の日本文學の特徴たる純文學、大衆小説の辨別、生ぜざりしやも知れず。現に紅葉の弟子等、純文學、大衆小説兩分野に進めり。又文章を考ふるに、言文一致の現代文に、日本人にとり、今より自然なる文章と、江戸期に連續せる文體、成立し得たるやも量り得ず。

三十五　斯かるは、思ふも益無し。されど尾崎紅葉、特に『金色夜叉』に、正宗白鳥の言ふ如き骨格の大きさあれば、斯かる事を考ふるを得さしむるなり。

三十六　尾崎紅葉が死の年に、弟子泉鏡花との間に、一事件あり。紅葉、泉鏡花の神樂坂藝者桃太郎と同棲せるを知りて怒り、鏡花を叱りて離別せしむ。何故に紅葉の怒れるやは知れず。されど鏡花、素直に師の言に從ふ。こは、後に鏡花が小説『婦系圖』の、芝居となりて上演せらるるに、湯島天神の早瀬主税・お蔦の別れの場、多くの人を感動せしむ。「湯島の白梅」なる演歌、そを唄ひて、長く世に唄はる（「湯島の白梅」聽くべし）。

三十七　實際に泉鏡花、紅葉が死後此の女性と同棲し、長き逡巡の後結婚す。一生を添ひ遂げたるすず夫人なり。内助の功ありし賢夫人にして、鏡花がものの好惡、性癖を知り盡し、日常生活の中に、鏡花の文學活動に適したる環境を調ふ。鏡花は金澤生れにて、父は彫金師なれど、幼時死別せる母、名、鈴は、江戸の能樂の鼓の名門出身なり。この母を生涯慕ひたる鏡花には、江戸生れの同名の夫人、母と同じく、江戸の文化を體現せる女性なりけむ。後年の鏡花の小説、随筆のここかしこに、夫人と鏡花自身の、仲睦まじく、互みに巧みなる冗談を交はすあり。

三十八　泉鏡花は尾崎紅葉の六歳年下なり。紅葉の『二人比丘尼色懺悔』を讀みて感激し、十七才にて上京、紅葉が内弟子となれり。紅葉家に書生兼玄關番とて住込み、紅葉より、一々の文章の添削等、親身なる指導を受く。

三十九　紅葉が斡旋にて、二十才前に、京都の日刊新聞に小説を連載せり。此の鏡花が處女作、評判は芳しからず、何度か連載中止の話ありしも、紅葉、新聞社を説得し、完結せしむ。しかのみならず、紅葉此の小説を、鏡花が郷里の新聞に轉載せしめたるらし。鏡花の一時金澤にありし時、新聞を買ふ金無きにより、毎日、新聞社社屋に行き、社屋の前に張り出されたる新聞に、自らの小説の掲載せられたるを見、嬉しく思ひたるとかや。

四十　父の死によりて、鏡花、東京より金澤に歸郷す。歸郷後も引續き、草稿、手紙を紅葉に送りて指導を受く。されど鏡花、家族扶養等に因り、經濟的、精神的に追詰められる。一時は、城の堀に身を投ぐるまでを思ふ。

四十一　ある晩鏡花、堀の周圍をさまよひ歩きしに、同じく堀に見入る若き女性あるに氣付けり。そが生への執着を呼戻したるにや、鏡花家に歸る。翌朝其の女性と覺しき近所の娘、堀に身を投げ、死せるを知る。ハンカチ工場に働く、武家出身の女工にして、刺繍の上手なり。鏡花、生涯、其の女性の我が身替りとなりて、我を救へりと思ひ續く。鏡花の最晩年、死の直前に書かれたる小説に、「縷紅新草」あり。そは、其の女性の死と、親戚の、撥刺たる若き主婦を題材に採り、人死なば、新しき人出づる人の世の流轉の哀れを、しみじみと感ぜしむる名作なり。

四十二　紅葉、自らの手元に屆きたる草稿と手紙より、鏡花が苦境と煩悶を察知す。直ちに書翰を送り、鏡花が氣の弱さをたしなむ。「破壁斷軒の下に生を享けてパンを咬み水を飲む身も天ならずや。其天を樂め」、あばら家に住み、飲食に事缺くも天の與へたる運命ならずや、其の運命を樂しめ、と。又弟子が天性の素質を、「汝の腦は金剛石なり。金剛石は天下の至寶なり」と褒め、研鑽を積まば、何れ素質の花開く日來るべし、「汝を磨…くこと數年にして、光明千萬丈赫々として不滅を照らさむ」と激勵し、幾許かの金額の爲替を同封す。

四十三　この師の書翰に因りて、鏡花は救はる。後年になりて、自宅を訪問せる若き弟子、水上瀧太郎に、鏡花、手箱に大切に藏せる此の書翰を取出し、眼に涙をため、押し戴きて之を示す。水上瀧太郎は企業經營者にして作家、筆名を鏡花が作品の作中人物より藉る。

四十四　鏡花にとり、紅葉は大恩人にして、絶對の師なり。或る時相弟子の德田秋聲、紅葉は菓子の食過ぎに因り命を縮めたりと言ひしに、鏡花、無禮なりとて、取っ組み合ひの喧嘩を仕掛く。芝居の稽古に舞臺に上りても、舞臺上に紙の紅葉の散るを見るや、師が名を憚り、踏まざるやう、そを避けて歩きたりと云ふ。されば『婦系圖』の如く、紅葉の同棲に反對せば、鏡花は、戀女房をも離別す。古風なる師弟關係の生きてあるなり。

四十五　鏡花が素質の花開く日、早く來れり。出世作、『夜行巡査』と『外科室』の發表せられしは、金澤にて、紅葉が書翰に救はれたる翌年のことなり。恐らくは此の二作品に、紅葉が添削の手、加はりたりけむ。されど紅葉は凡庸の師に非ず。添削しつつも、相手が素質、性向を知り、本人に適したる文體を模索せるならむ。其が爲なりや、此の二篇、紅葉が文章に異なる清新、個性的なる文體と、「觀念小說」と稱せらるる獨特の筋立てにて世人の耳目を惹けり。鏡花は一躍、新進作家中の白眉と目せらる。

四十六　其の鏡花出世作の一つ、『外科室』全篇、熊澤南水女史の朗讀を聽かむ。歌舞伎の坂東玉三郎丈、この小說を、吉永小百合主演にて映畫化せるは、ご存じの方あるべし。名流夫人と醫學士が至上の戀と死を描き、「觀念小說」と言はるるまでに突き詰めたる、いかにも鏡花らしき一篇なり。（熊澤南水女史の『外科室』朗讀）

四十七　『外科室』は文語文小說なれど、其の後鏡花、獨自の言文一致文體を創出す。されど時流に從はず、世を風靡せる自然主義とは一線を劃せり。『照葉狂言』、『高野聖』、『歌行燈』、『春畫』等、數多くの傑作を書き、明治後期より大正期に掛け、天才作家と持て囃さる。これらの作品に、今も時にテレビやラジオに取上げられ、さては演劇作品とて、劇場に上演せらるる多し。

四十八　歌舞伎と新派の芝居に、鏡花は、定番として上演せらるる作家なり。今も古びず。新派の『婦

系圖』、『瀧の白絲』、『日本橋』、歌舞伎の『天守物語』、『海神別莊』等、今も觀客に感動を與へ續く。歌舞伎にありて鏡花は、明治以後の作家中、上演頻度の最も多き作家數人に數ふ。而も鏡花の『天守物語』等、高年齡層と云はんより、近年の若き觀客より、壓倒的支持を受く。

四十九　鏡花、歐米歸朝組の森鷗外、夏目漱石よりも一目を置かれ、永井荷風、谷崎潤一郎、川端康成等に強き影響を及ぼす。大正より昭和になりても、作品を發表せる現役作家にして、若き作家らとの交流續けり。

五十　鏡花の文學、二つの事に讀者の眼を拓く。一つは靈の世界の氣配なり。靈の世界は、我等が日常的現實世界の裏側に、寄添ふ如く、或いは脅かす如くに存在す。時に日常世界の裂け、そこに忽然と、靈の世界、非日常の異界、露はなる姿を現す。鏡花が所謂幽靈小說、斯かるものならずや。今一つは女性原理の力なり。現實世界と靈の世界が交錯し、相互に入り交じる中を、女性原理の力、貫徹し、結合す。そを鏡花に從ひて、「觀音力」と呼ぶも可ならむ。靈の世界の怖しき鬼神の力を顯はす時、觀音力に恃まずして、いかで怖しさに堪ふるを得む。

五十一　泉鏡花が、類ひ稀なる文學の掘り起したるは、日本の文化傳統の中を、地下水の如く流るる、靈の世界の知覺と女性原理の力にあらざりしか。そは何れも、古代以來の日本にありて、文化と社會の表層近くに存在し續けり。然れども近代の歐米化に因りて、合理的思考と男性原理の支配に壓倒せられ、意識の外へ放逐せられたるに非ずや。そを再發掘せる鏡花の文學、柳田國男、折口信夫が民俗學、或いは谷崎潤一郎、川端康成が女人渴仰の文學に、繫ぐものあり。

五十二　鏡花、「文章の錬金術師」とて、文壇と社會より特別の敬意を拂はる。當初尾崎紅葉により錬磨せられたる獨自の文章、時代と共に洗練の度を加ふ。鏡花が文章を讀む讀者、いつか日常性と論理の筋を超え、知的言語の操作とは異なる次元にて、現實世界と靈の世界、意識と無意識の境界を辿る。されど現代の讀者、文學の愛好家にとり、鏡花の文章を讀むは難し。憾むらくは、現代の我等が、國語力と日本文化の知識、鏡花の作品を細部に至るまで理解し、そが香氣と喚起力を十全に味はふに足らざることとなり。

五十三　戰後の作家三島由紀夫、鏡花の文學につき、「どんなリアリズムも心理主義も」及ばざる、「數少い日本語（言靈）」表現、と評す。鏡花の如く、言靈を喚起し得る國語文を能く書く者、已に稀なりと言はんとせるらむ。鏡花亡き後、柳田國男、「泉鏡花が去ってしまってから、もう我々には國固有のなつかしいモチーフに、時代と清新の姿を賦與することが出來なくなったような感じがしてならぬ」と嘆く。されば昭和の作家にして、『李陵』の著者中島敦の、「日本人に生れ…日本語を解しながら、鏡花の作品を讀まないのは、折角の日本人たるの特權を拋棄しているようなものだ」と述ぶるはうべなり。

五十四　大正期に溯らば、芥川龍之介は、鏡花の世代を越え、親交を結びたる若き友人にして、鏡花が文學より多くを學びたる作家なりき。自身文藻の大家たりし芥川、平素鏡花を尊敬し、鏡花の文に「巨靈神斧の痕」を見る。此の若き友人が、昭和二年の突然の死、而も『泉鏡花全集』の編纂に、盡瘁したる後の自死を、鏡花、如何なる痛恨の思ひもて、見送りしぞ。

五十五　最後に、芥川龍之介の死に寄せたる、泉鏡花が文語弔辭を、熊澤女史の朗讀に聽かむ。此の文、明治以後の文語文中に、燦然と輝ける名文なり。恐らくは、昭和初年に書かれたる文語文中の珠玉、最高の典例ならむ。（熊澤南水女史の「芥川龍之介氏を弔ふ」朗讀）

（參考）

芥川龍之介氏を弔ふ

泉鏡花

玲瓏、明透、その文、その質、名玉山海を照らせる君よ。溽暑蒸濁の夏を背きて、冷々然として獨り涼しく逝きたまひぬ。倏忽にして巨星天に在り。光を翰林に曳きて永久に消えず。然りとは雖も、生前手をとりて親しかりし時だに、その容を見るに飽かず、その聲を聞くをたらずとせし、われら、君なき今を奈何せむ。おもひ秋深く、露は涙の如し。月を見て、面影に代ゆべくは、誰かまた哀別離苦を言ふものぞ。高き靈よ、須臾の間も還れ、地に。君にあこがるゝもの、愛らしく賢き遺兒たちと、溫優貞淑なる令夫人とのみにあらざるなり。

辭つたなきを羞ぢつゝ、謹で微衷をのぶ。

昭和二年八月